

# 谷沢川源流部(桃源郷ふたたび)

斎藤 憲一

■山行年月日:平成 30 年 8 月 18 日  
～19 日

■メンバー:斎藤憲一 堀江誠克

■コースタイム

18 日 自宅 5:00～大谷沢橋 6:40～サ  
ネミ坂合流 8:10～鍋倉山頂 12:00～  
毛無沢出合(BP) 14:40

19 日 BP9:00～サネミ坂合流 13:00  
～枝沢下降点 15:00～大谷沢橋 16:00

17 日夕刻、いつものごとく突然に過激なパートナーから「この土日何しているの？」とのメールが入る。「沢に行く！」と返信すると、「俺も行きたい」とのこと。あの堀江から沢に行きたいとの申し出があるとは、何としたことか？

明朝 5 時集合の約束をするが、斎藤との沢登りに行きたいという言葉には、堀江のある魂胆があったのである。

18 日 (土)

丁度一年ぶりの谷沢川源流部である。昨年苦労したアプローチであるサネミ坂下部の平坦地を省略するため、南大谷沢の枝沢からの新たなアプローチを事前に偵察していたことから、問題なくサネミ坂の山道に合流して、ここからは二度目のサネミ坂であるため順調に登り、美しいブナ林に感動しながら鍋倉山頂に達する。山頂からは、今回は迷わず北面沢を下り、8m を懸垂すると、続けてかなり大きな滝が現れ、今回軽量化のために、一本しか持ってこなかったロープでの懸垂で下まで届くかどうか心配したが、堀江がロープをセッ

トしてダウンさせるとギリギリ届き、この滝が 15m あることが把握できた。昨年の下降でこんな懸垂をしたかどうかも忘れてしまっていた斎藤も一安心である。その後は懸垂も困難な箇所もなく、本流の小ゴルジュに合流する。

本流の水量は昨年より随分少なく、時々走る魚を眺めながら、30 分程で毛無沢出合のBPに到着する。今回は夕暮れまでの時間がたっぷりあるため、まずは毛無沢に釣り糸を垂らすと、入れ食いで釣れて、二人分には十分な数を確保する。そしてこの結果は、ヨモギ沢でも同様であった。沢登りでの釣りは初めてだという堀江も、釣り上げた最初の獲物が 28 cm と今回の最大のもので、その数も二人とも同数程度の結果とあって、事前の私の話に懸念を持ってい

## 岩のエキスパートの貴重な本流での一枚



たようだった我が愛すべきパートナーも、あまりの結果にビックリと共に満足してくれたようで、私も一安心であった。

ビバーク地では焚き火での塩焼きをおかずに夕食を食べながら、その本性を剥き出しにした我が過激なパートナーは、今夏の体験を熱く語り始め、斎藤をある計画に巻き込もうと夜半まで、更に熱く熱く語り続けるのであった。

19日(日)

今日はヨモギ沢からサネミ坂を辿って戻るだけなので、のんびりと出発して、昨日も釣り上げた小さな釜で、今回の最後と称して糸を垂らすと同時に釣れてしまった。何という楽園であろうか。自然の恵みと貴重な体験に十分に満足し、すぐにリリースして確認だけにとどめ、その後は沢登りに専念していくつもりのだが、目はどこにでも走るイワナを追っている自分にすぐに気付いてしまう。結局、上部二俣の上に乗って魚影が見られ、これには改めて驚かされた。

ヨモギ沢左俣の詰め上がりも昨年とほぼ同様に、美しいブナの疎林を登り詰めて鍋倉山頂とサネミ坂分岐との中間部付近に到達し、あとは急傾斜のサネミ坂をスリッしながら下降して、往路の枝沢を下って南大谷沢に降り立つと、堀江はほてった身体を水流に横たえて冷やし

ていた。

この二日間を満足できる結果で終わることができたのには、これまで続いた猛暑日から一転して比較的涼しく、登下降のアプローチである南大谷沢でも、メジロは数匹が申し訳ないように飛んでいただけで、ビバーク地では蚊もおらず、快適に過ごすことができたこと。

そして何より、いくつかの山行スタイルの中でも、困難な岩壁登攀にしか目もくれなかった我が過激なパートナーが、癒しのブナ林と自然の恵み、そして自然との一体感の中でゆったりと流れる時間に満足してくれたことである。と、推測しておくことにしよう。

